

栄養教諭と担任が共働する小学校家庭科授業の提案

—well-being の観点を用いた「生きる力」を育む小学校5年生の年間指導計画—

青木 孝文*1 合田 喜賢*2 塩津 敦子*1

要 旨

現代は、時代の変遷や科学技術の発展と共に、普遍的価値の範囲が縮小し、道徳的価値を基礎とした、個別的な価値観が無数に存在する、多様化の時代を迎えている。したがって、未来を生きていく子どもたちが、無数の価値観に対し「答えが無い」と悲観するよりも、「答えが無数の可能性に満ちている」と期待できるような「生きる力」(well-being)を持ち、高め、次世代に引き継いでいくことが重要と言える。その方法として、多様性かつ専門性の担保に加え、持続可能な学校指導・運営体制の構築も可能と言える。小学校家庭科における栄養教諭の通年での授業参画を提案したい。well-being を構成する5つの要素を満たす「食」あるいは「栄養」を介し、実生活ですぐに実践可能な「家庭科」の授業を通して、「生きる力」の向上、すなわちwell-beingが達成できることを期待する。

Keywords : well-being, 「生きる力」, 栄養教諭, 家庭科
well-being, “zest for living”, nutrition teacher, home economics

1. 背景

科学技術の発展とともに、情報の蓄積や共有が容易になってきている。現在ではインターネットを介して、時間・地域・年齢を問わず、瞬時にありとあらゆる情報にアクセスできる。すなわち情報過多の状態である(society4.0; 栗原聡, 2020)。そして、この情報過多に対し、生成AIの登場により必要な情報を瞬時に抽出できるようになりつつある(society5.0; 栗原聡, 2020)。しかしながら、期待した情報を得るにはプロンプトの正確性が重要となること、内容の信憑性には注意が必要であること、著作権や個人情報の侵害をきたす恐れがあるなどリスクが伴う(東京大学, 2023)ことその他に、予想できない問題が待ち受けているのも事実である。我々は、情報に飲み込まれることなく、最新技術を使いこなし、多様化した社会においてより良く生きていくことが求められてきている。すなわち、協力して働く「協働」というよりも、多くの違いを認識・理解しつつも、それぞれが尊重され、対等な関係で働くような「共働」を行い、共生社会を作り上げることが必要ではないだろうか。このような状況とともに、学習指導要領が改訂され、引き続き「生きる力」を育むことが最重要課題として掲げられた(文部科学省, 2017b)。端的に言えば「自身の嗜好に合わせて社会生活を営み、well-beingを達成することができる」多様な教育を行うということであろう。

多様な教育実践を可能にする制度として、次の2つが挙げられる。1つ目が、特別免許状や特別非常勤講師制度である(文部科学省, 1998)。すなわち教員免許状を有しない優れた

*1 川崎医療福祉大学 医療技術学部 臨床栄養学科

*2 川崎医療福祉大学 医療福祉マネジメント学部 医療福祉デザイン学科

知識経験等を有する社会人，あるいは地域の人材や多様な専門分野の社会人を学校現場に迎え入れることで，多様で専門性の高い教育を行える体制を整えるということである．2つ目が，新しい時代の教育に向けた持続可能な学校指導・運営体制の構築のための学校における働き方改革である（文部科学省，2019）．現在，その一端として運動部活動の地域移行が行われている．これは，教諭自身の well-being 達成のためにも重要である．

本稿では，これら2つを兼ね備える手法として，栄養教諭の通年での小学校家庭科授業への参画を提案したい．ここで想定している栄養教諭とは，各小学校ですでに勤務している教諭および前述した特別免許状を得た者や特別非常勤講師を含むものである．担任だけでなく，栄養教諭が「栄養」の専門性を授業に活かし，社会生活を営む上で切り離せない「食」を通して「家庭科」の授業を展開することで，児童と教員共に well-being の達成に近づくことができるのではないだろうか（図1）．小学校5年生をモデルに年間指導計画，指導内容，評価方法を作成し，本提案の可能性を示す．

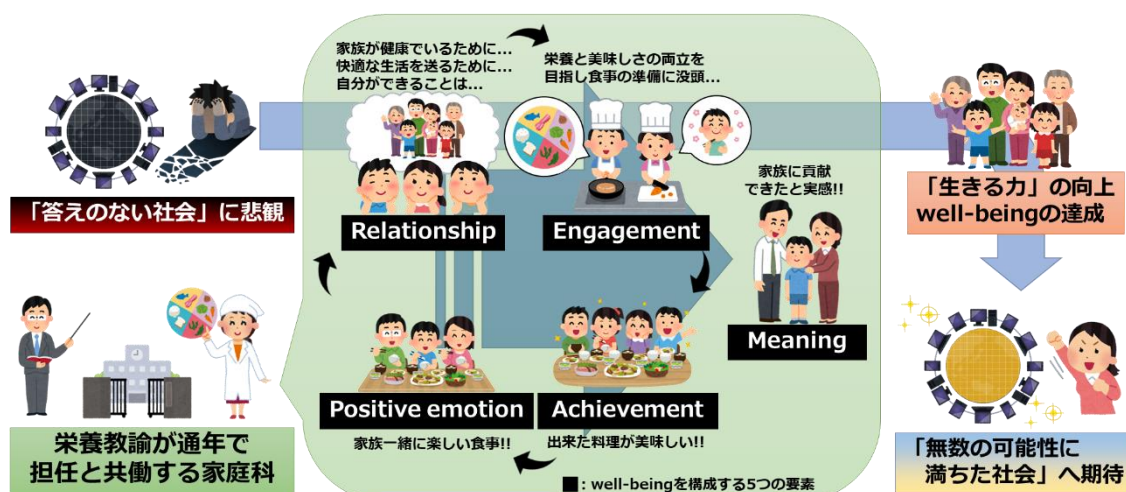


図1：本提案の目指す「食」と「栄養」を介した、子どものwell-being達成計画

2. 小学校5年生をモデルにした栄養教諭と担任が共働する家庭科年間指導計画

2.1 計画概要

栄養教諭と担任が共働する小学校5年生家庭科の年間指導計画を実施学期ごとに，題材・内容，該当する学習指導要領の内容項目（文部科学省，2017a），到達目標，評価観点，評価方法に分けて表1にまとめた．学習指導要領における「家庭科」の目標は，生活の営みに係る見方・考え方を働かせ，衣食住などに関する実践的・体験的な活動を通して，生活をよりよくしようと工夫する資質・能力を育成することを目指している（文部科学省，2017a）．すなわち，家庭あるいはその他の社会生活において，「知識や技能」を深め，現状に対し「思考力・判断力・表現力等」を発揮し，生活をよりよくする工夫を考案し，トライアンドエラーを通して粘り強く実践すること，そしてそれらを繰り返し「学びに向かう力，人間性等」を育み，well-beingを達成するということであろう．したがって本計画は，「食」と「栄養」

を中心とした視点で、家庭の指導範囲を網羅し、それを契機に子どもたちが社会生活とのつながりを探り、well-beingをいかに達成するかということを目的に作成した。なお、ここでいう「共働」は、立場などの多くの違いを認識しつつも、それぞれが尊重され、対等な関係で働き、影響しあうことを想定している。

2.2 題材・内容と到達目標

学習指導要領に基づき5年生では、現状実施されている基礎的な内容について、「食」あるいは「栄養」の視点から捉え、学習を深めていける題材・内容とした。なお、各題材・内容が「家庭科」のどの内容項目に該当するかを示すために、その欄を設けている(表1)。最初の授業において全体を俯瞰するためのポートフォリオを作成し、年間を通してwell-beingを主観的に(自己)評価することとし、年間の目標を設定することとした。各回の到達目標は、学習指導要領の目標とwell-beingの達成のために、各題材・内容と内容項目に関連させ設定した。また、より確かな学びのためのツールとしてICT機器を活用し、ポートフォリオの一部共有と閲覧、動画や画像によるイメージの共有、調理などによる食材の変化の記録、それらの作成物への使用、パワーポイント等を用いたプレゼンテーションの実施、投票とそのリアルタイムの集計結果提示などに用いることとした。

2.3 評価

学習指導要領の改訂を踏まえ、国立教育政策研究所において、「指導と評価の一体化」の参考資料が示されており(文部科学省 国立教育政策研究所 教育課程研究センター, 2020)、さらにその解説を丸山(丸山早苗, 2020)が行っている。これらの文献を参考に、学習状況評価のための各観点における主な内容・評価方法・評価ポイント・評価基準を整理した(表2)。表2を基に、表1における評価観点と評価方法として客観的評価に加え、上述の通り自己評価(主観的評価)を組み込んだ。各評価観点の位置づけとしては、従来からの客観的な評価を「知識及び技能」として、well-beingを「学びに向かう力、人間性等」として、その間を繋ぐものとして「思考力・判断力・表現力等」で評価することと捉えて作成した。

3. 考察

アメリカの心理学者 Seligman は、well-being を達成するための5つの要素を示している(Seligman, 2014)。具体的には、自身にとって心地よい、楽しいという気持ちである Positive emotion, 何かへのめり込み没頭する Engagement, 何かをやり遂げて達成や成功を味わう Achievement, 家族や友人などの社会的な関係を良好に保つ Relationship, そして要素の中で最も重要な、生きがいや自身が生きていることに意味がある、意義のある生活を過ごしていると感じる Meaning の5つである。注目したいのは、主観的な(自己)評価により測られるということである。さらに、この5つの要素にはいずれも「食」あるいは「栄養」が関与することである。具体的に例を挙げれば、家族の健康を担保する(Relationship)ため、栄養を考えて美味しくなるように調理へ没頭する(Engagement)。出来上がった料理が実際に美味

表1-1：5年生家庭科における栄養教諭が通年で担任と共働する年間指導計画(1学期)

月	時数	題材・内容	内容項目	到達目標	評価観点	評価方法
4	4	●家庭科の学習を始めよう～家庭生活の仕事とは～ ・家庭科の学びの全容の説明 ・到達目標として、学習指導要領で示されている目標について提示する ・生活の基盤となる金銭の捻出方法(保護者の仕事)と家事を調査しておく ・家庭生活を行う上で必要な家事とその担当者、実施時間を考える ・家事の中で、何をどこまで出来るようにしたいかを目標設定を行い、各単元において評価できるポートフォリオを作成する ・web上で双方向に一部閲覧、一方向にリアルタイムで編集できるよう共有設定を行い、自己評価や同級生の状況を確認し、アイデアや価値観の共有と多様性の受容の下地を養う ・加えて情報リテラシーについて理解する	A～C	①家庭生活の全体像の把握 ②生活の中で、目標設定と自己評価できる資料を作成する *参考資料として上坂と中森(2020)の文献を用い、well-beingに関連する項目の自己評価を加える(例：表3)	学	・ポートフォリオ
	2	●食生活の決め手は何か考えてみよう ・家事の中でも食事、食生活について、より詳しく学習を行う ・自身や家族が食べるものは、何から決まるのかを考える ・栄養や健康面に加え、嗜好や行事、そして社会(地域性や環境)の影響など、生活を送るうえで食生活が密接に関わることを認識する	A(2), (3) B(1), (3) C(1), (2)	①食生活の決定因子と知識や社会との関わりについて理解する	知	・行動観察(話し合い・発表) ・確認テスト
5	2	●食事はどうやって作られるか調べてみよう ・食材の生産から、配送、献立作成、購入、下ごしらえ、調理、片付けなど社会資源の利用と喫食者の状態に影響を受け変化することを認識する ・自身と友人の家庭での同異点について、どのような因子が影響するか、話し合いや発表を通して理解を深める	A(2), (3) B(1)～(3) C(1), (2)	①家事としての食事について理解を深める	知	・行動観察(話し合い・発表)
	2	●調理をしてみよう1 炊飯、だしの取り方、お味噌汁の作り方 ・炊飯・昆布とかつお出汁の取り方・みそ汁の作成 ・ご飯が炊けるまでの変化をICT機器を活用し記録する ・だしのみ、だしなしのみそ汁、だし入りのみそ汁で味を比べる ・だしなしのみそ汁に味噌を加えて、同程度の塩味になる味噌の量を知る ・その時の塩分濃度を塩分濃度計を用いて測定する ・宿題：ご飯の調理による変化とだしの有無による味の変化についてレポートを作成する	B(2)	①調理をする意味について理解を深める	知	・行動観察(調理) ・レポート
	2	●調理をしてみよう2 茹で方をマスターしよう ・卵と青菜の茹で方について ・茹で時間と時間による食材の変化をICT機器で記録する ・茹で時間の違いによる味・食感への影響について確かめる ・宿題：おいしい茹で時間とその理由についてレポートを作成する	B(2)	①調理をする意味について理解を深める	知	・行動観察(調理) ・レポート
6	2	●献立を作ってみよう1 朝ごはんの献立を作ってみよう ・家で朝ごはんについて記録する ・朝ごはんはどんな食べ物をよく食べるかを考えてみる ・グループで、食べたい朝ごはんを考える ・朝の家庭状況を思い浮かべ、献立を考える上で注意点を考える ・その注意に基づいて、再度献立を考える	A(1), (2) B(1)～(3)	①学んだ内容を活かし、家事としての食事の作成について、課題設定し、解決方法立案、実践する	思	・行動観察(話し合い・発表) ・作成した献立
	2	●調理をしてみよう3 考えた朝ごはんを作ってみよう ・作成した朝ごはん献立の調理を行う ・計画通りだったこと、計画にそぐわなかったこと、どう対処したか、今後の改善計画についてレポートを作成する ・ポートフォリオを確認し、自己評価結果をレポートとともに提出する	B(2)	①学んだ内容を活かし、家事としての食事の作成について、計画に基づき実践、評価改善し、課題解決力を身に付ける	思	・行動観察(調理) ・レポート ・ポートフォリオ
	2	●家事に必要な時間と費用を計算してみよう ・調理に必要な時間とお金を計算する ・食材のグループに分類を行い、どんな食材で価格が変動するか感じる ・それを給食費と比較してみる ・価格を調整するためのポイントについて理解を深める	A(1), (2) C(1)	①消費生活について食事の作成から理解を深める	知	・行動観察(話し合い・発表) ・確認テスト
7	2	●栄養を考えてみよう1 体に必要な栄養って何だろう ・体に必要な栄養素の種類について考える(5大栄養素) ・どの栄養素がどの食品から補給できるかを考える ・各食品をグループとして分類できるように理解を深める	B(3)	①食事から栄養について理解を深める	知	・行動観察(話し合い・発表) ・確認テスト
	2	●栄養を考えてみよう2 なぜ栄養は必要なんだろう ・各栄養素が体の中でどんな役割を持っているか考える ・それぞれの栄養素をどのくらい食べたらよいか考える ・給食を例に、適切な栄養補給のための献立作成について理解する ・夏休みの宿題の提示	B(3)	①食事から栄養について理解を深める	知	・行動観察(話し合い・発表)
夏休み	-	●夏休みの宿題 朝ごはんを用意してみよう ・授業で作成した朝ごはんを基に、家庭でも家族の朝ごはんを用意する ・外食、中食、自作は問わない ・食材購入等から行い、必要時間と経費を算出する ・ICT機器で画像や動画の記録を行う ・発表できるようにスライドテンプレートに当てはめる	A(1)～(4) B(1)～(3) C(1)	①学んだ内容を活かし、家事としての食事の作成について、改善案に基づき実践、再評価改善し、課題解決力を身に付ける	思	・スライド内容

・評価観点における各文字は次の言葉を示す。知：「知識及び技能」、思：「思考力、判断力、表現力等」、学：「学びに向かう力、人間性等」

表1-2：5年生家庭科における栄養教諭が通年で担任と共働する年間指導計画(2学期)

月	時数	題材・内容	内容項目	到達目標	評価観点	評価方法
9	2	●朝ごはん報告会：準備 ・記録から朝ごはんの準備に必要な時間とお金を計算する ・時間とお金を含めて、スライドを印刷し、掲示する	A(1)～(4) B(1)～(3) C(1)	①学んだ内容を活かし、家事としての食事の作成について、改善案に基づき実践、再評価改善し、課題解決力を身に付ける	思	・スライド内容
	2	●朝ごはん報告会 ・掲示してあるスライドに対し、栄養面、嗜好面、社会面(費用や時間)について総合評価を行い、上位3献立を選出し、ICT機器で投票を行う ・発表に関しては、教員からの特別選出枠を設け、優秀以外の個人の価値観の重要性を提示できるように配慮する ・上位4名+特別枠1名の児童に、その内容を10分程度で報告してもらい ・ポートフォリオを用い、自己評価を行い今後の課題について記録する	A(1)～(4) B(1)～(3) C(1)	①学んだ内容を活かし、家事としての食事の作成について、まとめて、表現する ②1学期の成果である夏休みの宿題を通して、ポートフォリオを活用し自己評価を行う。	学	・スライド内容 ・ポートフォリオ
	2	●食事のマナーについて考えよう ・社会マナーについて食事面から考えていく ・どんな食事の作法が存在するか知る ・ICT機器を用い、動画として確認し、想定される状況をイメージする ・社会性を構築する食事の大切さについて理解を深める	A(1) B(1)	①社会生活を円滑に行うための食事に関する作法とその伝統について理解を深める ②社会性を高めるツールとしての食事について認識する	知	・行動観察(話し合い・発表) ・確認テスト
10	2	●SDGsを考えよう1-生ごみから肥料を作ろう- ・実際に家庭生活で行っているSDGsを調査してくる ・中でもSDGsを達成するために、身近な食生活からできることを探す ・SDGsの例として、生ごみを肥料に変換することを調理実習で実践する	A(4) C(2)	①社会生活を持続するためのSDGsについて、家庭生活から理解する	知	・行動観察(話し合い・発表)
	2	●献立を作ってみよう2 昼ごはんの献立を作ってみよう ・家での昼ごはんについて記録する ・昼ごはんはどんな食べ物をよく食べるかを考えてみる ・グループで食べたい昼ごはんを考える ・昼の家庭状況を思い浮かべ、献立を考える上で注意点を考える ・加えて学んだ栄養の知識を取り入れる ・その注意に基づいて、再度献立を考える	A(1)～(4) B(1)～(3) C(1)	①学んだ内容を活かし、家事としての食事の作成について、栄養面も考慮し、課題設定、解決方法立案、実践する	思	・行動観察(話し合い・発表) ・作成した献立
	2	●調理をしてみよう5 考えた昼ごはんを作ってみよう ・考えた昼ごはんを調理する ・生ごみを肥料として使える準備をする ・計画通りだったこと、計画にそぐわなかったこと、どう対処したか、今後の改善計画についてレポートを作成する ・ポートフォリオを確認し、自己評価結果をレポートとともに提出する	A(1), (2) B(1)～(3) C(2)	①学んだ内容を活かし、家事としての食事の作成について、栄養面も考慮し、計画に基づき実践、評価改善し、課題解決力を身に付ける	思	・行動観察(調理) ・レポート ・ポートフォリオ
11	2	●費用を計算してみよう2 ・考えた昼ごはんの費用を計算する ・費用を食材ごとにABC分析を行う ・家計を支える食生活について何にお金がかかるかを理解する	A(1), (2) C(1)	①消費生活について食事の作成から理解を深める	知	・行動観察(話し合い・発表) ・確認テスト
	2	●SDGsを考えよう2 -ごみの分別- ・調理実習で使用した物品の捨て方について考える ・生ごみの変化を確認する(今後、分担して状況確認を行う) ・環境に配慮した消費について食生活から考える	A(1), (4) B(1), (6) C(2)	①社会生活を持続するためのSDGsについて、家庭生活から理解する	知	・行動観察(話し合い・発表)
	2	●調理に必要な衣類や道具を考えてみよう (季節、行事による変化) ・日常的な衣類にどんなものがあるか考える ・それらの衣類の役割について考える ・調理の際に用いる衣類、その他の布製品について役割を考える	A(1), (2) B(4)	①衣類の働き・役割について、食生活の視点から考え、実践的に理解を深める	知	・行動観察(話し合い・発表)
12	4	●調理に必要な衣類を作成しよう1 ・基本的な縫い方について学習する。 ・学習した内容をランチオンマット、鍋つかみ、台ふきなどを作成する ・役割の違いで、どのような布が適しているかを感じる ・作成したものを洗濯し、適した洗い方を身に付ける ・作成物は家庭あるいは学校での喫食時に使用する ・ポートフォリオを用い、自己評価を行い今後の課題について記録する	A(1), (2) B(5)	①食生活に必要な布製品の作成を通し、課題設定し、実践する	思	・行動観察(裁縫) ・作成物 ・ポートフォリオ
冬休み		●冬休みの宿題：昼ご飯を用意してみよう ・授業で作成した昼ごはんを基に、家庭でも家族の昼ごはんを用意する ・外食、中食、自作は問わない ・食材購入から行い、必要な時間と経費を算出できるように記録しておく ・ICT機器で画像や動画の記録を行う ・発表できるようにスライドテンプレートに当てはめる	A(1), (2), (4) B(1), (3) C(1)	①学んだ内容を活かし、家事としての食事の作成について、栄養面も考慮し、改善案に基づき実践、再評価改善し、課題解決力を身に付ける	思	・スライド内容

・評価観点における各文字は次の言葉を示す。知：「知識及び技能」、思：「思考力、判断力、表現力等」、学：「学びに向かう力、人間性等」

表1-3：5年生家庭科における栄養教諭が通年で担任と共働する年間指導計画(3学期)

月	時数	題材・内容	内容項目	到達目標	評価観点	評価方法
1	2	●昼ごはん報告会 ・ 掲示してあるスライドに対し、栄養面、嗜好面、社会面(費用や時間)について総合評価を行い、上位3献立を選出し、ICT機器を用い投票を行う ・ 発表に関しては、教員からの特別選出枠を設け、優秀以外の個人の価値観の重要性を提示できるように配慮する ・ 上位4名+特別枠1名の児童に、その内容を10分程度で報告してもらい ・ ポートフォリオを用い、自己評価を行い今後の課題について記録する	A(1), (2), (4) B(1), (3) C(1)	①学んだ内容を活かし、家事としての食事の作成について、栄養も考慮し、実践内容をまとめ、表現する ②2学期の成果である冬休みの宿題を通して、ポートフォリオを活用し自己評価を行う。	学	・スライド内容 ・ポートフォリオ
	2	●快適な日常生活を考えようー給食作成の環境基準からー ・ 給食作成に適した環境基準(湿度、温度、明るさ)について知る ・ その基準を基に、日常生活へあてはめ、快適な日常生活について考える ・ 特に季節の変化(梅雨、夏、冬)について、実際の生活を振り返る	B(6)	①快適な住まい方について、給食作成基準の視点から、実践的に理解を深める	知	・行動観察(話し合い・発表)
	2	●快適な日常生活を考えよう2ー給食作成の衛生管理・食中毒についてー ・ 健康な生活を送るうえで食生活の衛生管理は重要となる ・ 食中毒について発生要因、予防方法(手洗いを含めた衛生管理、調理方法(加熱温度や消費、賞味期限)、掃除方法)について理解を深める	A(1), (2) B(6)	①快適な住まい方について、給食作成基準の視点から、実践的に理解を深める	知	・行動観察(話し合い・発表)
2	4	●給食センターに行ってみよう ・ 1年間のまとめとして、家庭生活、衣食住、消費、環境への配慮について、身近な給食センターの視点から学びを深めるとともに、地域連携事業の一環として実施する	A~C	①1年間のまとめとしての課外活動を行い、家庭生活、衣食住、消費、環境への配慮について、実践的に学びを深める	知	・行動観察(見学)
	2	●給食センター報告会準備 ・ 各班で印象に残った内容について、自身の生活に取り入れる方法を考え、相談しまとめる ・ 発表できるようにスライドテンプレートに当てはめる	A(1)~(4)	①見学した内容の中で、自身の生活に取り入れたい内容について考え、課題設定し、解決方法立案、実践計画を立てる	思	・スライド内容
3	2	●給食センター報告会 ・ 各班で印象に残った内容について発表を行う	A(1)~(4)	①見学した内容の中で、自身の生活に取り入れたい内容について考えをまとめ、表現する	思	・スライド内容
	2	●家庭科の学習を振り返ろう ・ 1年間の学びを通し、家庭の仕事で何ができるようになり、何ができていないか、次の1年間で何をがんばるかを自己評価し、ポートフォリオにまとめる	A~C	①1年間の学びを、ポートフォリオを活用し自己評価を行う	学	・ポートフォリオ

・評価観点における各文字は次の言葉を示す。知：「知識及び技能」、思：「思考力、判断力、表現力等」、学：「学びに向かう力、人間性等」

表2：学習状況評価のための各観点における主な内容・評価方法・ポイント

評価観点	評価内容	評価方法	評価ポイント・評価基準
「知識及び技能」	何を理解して、何が出来るか	ペーパーテスト 発表・話し合い	①事実的な知識の習得を問う問題 ②知識の概念的な理解を問う問題を主に用いる。 文末を、「～を(～について)理解している」等とし、評価基準とする。
「思考力・判断力・表現力等」	理解していること できることをどう使うか	レポート 発表・話し合い 作品制作・表現 ポートフォリオ	①課題設定 ②解決方法 ③評価・改善 ④表現することを主に捉える。 文末を「～について課題設定し、解決方法を考え、実践を評価・改善し、考えを表現し、課題解決能力を身に付けている」等とし、評価基準とする。
「学びに向かう力、人間性等」	どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか	レポート ポートフォリオ	①粘り強さ ②自らの学習の調整 ③実践しようとする態度を主に含める。 文末を「課題解決に向けた主体的な取り組み(①)、自己評価と改善策の考案(②)、改善策を実践しようとしている(③)」等とし、評価基準とする。

・文部科学省 国立教育政策研究所 教育課程研究センター，2020；丸山早苗，2020から著者が整理した。

しく (Achievement), そして一緒に楽しく食事をして (Positive emotion), 自身が家族に貢献できていると実感する (Meaning ; 図 1). 本計画は, このような例の達成を目指し作成したものである (表 1).

well-being 達成のために最初の授業では, 自身の家庭について, 家事と家庭における自分の役割, そして家事の何がどこまでできて, 何ができないのかを把握し, 自己評価可能なポートフォリオの作成を行う. 次に, 「食生活」を基に, 食事の決定因子が「栄養」や「健康」だけでなく, 「嗜好」や「行事 (季節やイベント ; 誕生日やクリスマスなど)」, さらには「社会 (地域性, 環境, 経済面など)」にも影響されることを認識し, 家庭という身近な社会と居住地域に加え, 日本という大きな社会とのつながりを意識させ, 価値観の拡大を図る. 1 学期終了までに, 簡単な調理と栄養の基礎知識, さらには経費や時間の概念も関連して学習する. そしてその実践として, 夏休みの宿題に朝ごはんの準備を家庭で行うことで, 自立の契機を供与している.

2 学期には, 夏休みの宿題の報告会を経て, 自身と他者の両方の成長を確認すると同時に, 教員からの特別選考者による発表と教員が発表を指示した意図の提示から, 優劣以上の多様な価値観の重要性について示唆を行い, それを児童に意識させる. さらに, ポートフォリオを用いて自己評価を行い, well-being の達成状況の把握と今後の取り組みを明確化させ, 更なる自立を促す. また, 社会性の向上として, 食事マナー, SDGs への取り組み, 裁縫, 栄養を考えた献立作成と調理を経て, さらなる成長を図っている.

3 学期には, 2 学期同様に冬休みの宿題 (昼ごはんの準備) の報告会を経て, 再度自己評価を行うこと, 社会性の向上として, 給食作成基準から快適な住まい方に必要な湿度・温度・明るさ, 手洗いを含めた衛生管理, 清掃方法を学習する. 総まとめとして, 地域連携事業と 1 年間の学習内容について実際の現場から学びを深めるために給食センター見学会を設けている. 年間の最終授業では, 再々自己評価を行い, 現状把握と今後への期待を込めた目標設定を行い, 自立と well-being の向上へ役立てている.

一方で, 子どもの well-being をどのように規定し自己評価をするか, そしてその題材を作成できない限り本計画は破綻する. この 1 つの答えになりうるのが, 上坂と中森の先行研究である (上坂美紀ら, 2020). この文献において, 子どもの well-being は「子どもが日常的に健康で基本的な生活の状態にあり, 自立した大人へと成長できる生活環境が整えられている状態」と定義され, 「各生活場面」に該当する内容とその評価の枠組みが「家庭科」の学習指導要領の項目と関連付けて提示されている. さらに, 「基本的な生活」レベルと「よりよい生活」レベルに区分され, 生活全般の満足度だけでなく, 生活実態把握と改善の視点が設けられ, 客観的にも生活が満足できる状態かを, 子ども自身が評価できるように設計されている. 例を挙げると, 「食生活」では, 「基本的な生活」レベルは, 栄養を考えた食事, 米飯とみそ汁の日常食の調理, 「より良い生活」レベルは, 栄養バランスを考えた 1 食分の献立の工夫, 楽しく食事をするための工夫とされている. また, 自立についても生活的自立, 経済的自立, 社会的自立, 精神的自立, 全体指標と区分され, 子ども自身が自立した生活を

過ごせているかどうかの把握に役立ち、well-beingの状態を評価できると考えられる。これらの内容を、ポートフォリオ作成に活かすことで評価項目の作成が担保できると言える。実際に、児童が自己評価を行える基準として、ルーブリックの試案を表3として示す。

表3：ポートフォリオにおけるwell-beingの自己評価のためのルーブリック案

観点	説明	評価の基準			
		4 「より良い生活」レベル	3 「基本的生活」レベル	2	1
Engagement	食事の準備を、集中して行えたか	計画に工夫を凝らし、集中して、食事の準備を行った	集中して、食事の準備を行った	集中せず、食事の準備を行った	食事の準備をしなかった
Positive emotion	家族らとともに、食事を楽しく食べることができたか	家族らと、工夫をいすごく楽しく食事をした	家族らと楽しく食事をした	家族らと食事をしたが、特に会話などはしなかった	家族らとともに食事しなかった
Achievement	計画通り、食事の準備ができたか	計画に工夫を凝らし、計画通り食事の準備ができた	計画通り、おおむね食事の準備ができた	食事は準備できたが、計画通りにいかなかった	食事が準備できなかった
Relationship	食事の準備に際して、家族の健康を考えたか	家族の健康を考えて、主食、主菜、副菜を整え、食事の準備をした	家族のことを考えて食事の準備をした	食事の準備をしたが、家族のことはあまり考えなかった	食事の準備をしなかった
Meaning	食事の準備をすることで家族に貢献できた実感があったか	家族らに喜んでもらえて、とても実感できた	実感できた	食事の準備をしたが、実感できなかった	食事の準備をしなかった

提案の実現可能性について検討するために、関連する先行事例について調査を行った。特別免許状や特別非常勤講師制度に関する事例集（文部科学省，2016a；文部科学省，2016b）では、特別免許状を持つ教員が通年で英語の授業担任として参画する事例が存在した。栄養教諭の指導事例（文部科学省，2009；文部科学省，2013）を見てみると、単回から数回の「家庭科」の授業への参画は存在したものの、継続して通年の授業を担当した事例は存在しなかった。すなわち、新規性そして独創性が高いものの、「家庭科」における通年での授業担当は必ずしも現実的ではないとは言えない。さらに、実現可能性を高めるために、本提案に伴うメリットとデメリット、および考えられうる解決策や捉え方とともに表4へまとめた。

表4 栄養教諭と担任が共働する小学校家庭科授業で想定されるメリットとデメリット及びその解決策

項目	内容
メリット	① 栄養教諭が主となり授業を展開することで、専門性を担保することが可能である。 ② 同様の理由から、担任の授業負担の軽減に伴う働き方改革の推進を補助できる。 ③ 栄養教諭は、安定した授業機会の確保により、教諭としてのキャリアアップの機会が担保される。
デメリット	① 「食」および「栄養」に関連することに傾倒し、多様性が失われる危険性がある。 ② 栄養教諭の負担が増加する。
デメリット①の解決策	「生きる力」が養成され、その力が向上すれば、専門的な内容を基礎とし、実生活への応用（般化）が可能（伊藤圭子，2016）と言えるため、デメリットを補える可能性は十分にある。
デメリット②の解決策	各学校の栄養教諭の現状を考慮し、段階的な導入や一部導入など柔軟な実施を計ることで現実的な落としどころを検討する。

4. まとめ

本稿は、多様性かつ専門性の担保に加え、持続可能な学校指導・運営体制の構築のために、栄養教諭と担任が共働する小学校 5 年生家庭科をモデルに年間指導計画を作成したものである。学習指導要領における「家庭科」の目標が達成できるように到達目標を設定し、基礎的な部分を固めるために、評価観点の「知識および技術」の項目を多くし、その後に「思考力・判断力・表現力等」の項目を配置することで、知識の活用を意識させている。最終的に「学びに向かう力、人間性等」を各学期の前後に配置することで、自己評価から児童の認識・思考、学力等の実態を視野に入れることと、児童自身でその改善策の作成ができるよう配慮してあることに加え、その個人の状況を共有できる工夫として ICT 機器の活用を盛り込んでいる。そして、「家庭科」全体における主な内容ならびに全体構造については表 1 の内容項目に示すことで、教員と児童共に目的の明確化やその達成を目指している。

現代は、国外だけでなく国内においても、そして政治や経済も問わず、統合や一極集中の限界が現実になって表れてきている（渡辺雅子，2021）。これは、個人の価値観においても同様の変化が実感できる。普遍的価値の範囲が縮小し、ある一定の道徳的価値を基礎とした、個別的な価値観が無数に存在する、いわゆる多様化の時代である。したがって、現在から続く未来の社会では、小規模な社会において、自分たちで価値を選択し、自分たちが暮らす小規模な社会あるいは他の社会と、いかに安全かつ持続可能に助け合い、そしてどのようにより良く生きていくかが求められる。加えて、共生社会と新規問題解決のためにも、お互いの違いを認識しつつ、その違いの受容と尊重を行いながら働き、影響しあう「共働」が必要と言える。重要なのは、「答えの無い」ことに対して悲観するよりも、「答えが無数の可能性に満ちている」と期待できるような「生きる力」(well-being)を持ち、高め、そしてそれを次世代に引き継いでいくことではないだろうか(図 1)。well-being を構成する 5 つの要素を満たす「食」あるいは「栄養」を介し、実際の生活ですぐに実践可能な「家庭科」の授業を通して、子どもたちの「生きる力」すなわち well-being の達成に近づけられることを望む。今後の課題としては、小学校 6 年生での年間指導計画の作成が必要であること、各題材における具体的な授業案の作成が必要であること、実際に授業実施を通して事例を収集することが挙げられるため、今後の研究に期待したい。

文 献

- 伊藤圭子. (2016 年). 特別なニーズのある子どもを対象とした家庭科教育. 日本家庭科教育学会誌, 59 (1), 3-12.
- 上坂美紀, 中森千佳子. (2020 年). 子どもの主観的 well-being における「生活評価」指標の枠組みと指標の提案. 日本家政学会誌, 71 (10), 631-647.
- 栗原聡. (2020 年). AI 脅威論の正体と人と AI との共生. 情報通信政策研究, 4 (2), I-45-I-54.
- 東京大学. (2023 年 4 月 3 日). 生成系 AI (ChatGPT, BingAI, Bard, Midjourney, Stable

- Diffusion 等) について. (東京大学理事・副学長 (教育・情報担当) 太田 邦史).
<https://utelecon.adm.u-tokyo.ac.jp/docs/20230403-generative-ai>, (2023年6月23日閲覧).
- Martin E. P. Seligman, 訳: 宇野カオリ. (2014年). ポジティブ心理学の挑戦 “幸福” から
“持続的幸福”へ. 東京, ディスカヴァー・トゥエンティワン.
- 丸山早苗. (2020年). 家庭科における指導を充実させるための評価の在り方とそのポイント. 初等教育資料, 999, 16-21.
- 文部科学省. (2019年1月25日). 新しい時代の教育に向けた持続可能な学校指導・運営
体制の構築のための学校における働き方改革に関する総合的な方策について (答申),
https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2019/03/08/1412993_1_1.pdf, (2023年6月23日閲覧).
- 文部科学省. (2009年). 栄養教諭による食に関する指導実践事例集.
https://www.mext.go.jp/a_menu/sports/syokuiku/1281570.htm, (2023年6月23日閲覧)
- 文部科学省. (2013年). 栄養教諭を中核とした食育推進事業事業結果報告書 (平成25年
度). https://www.mext.go.jp/a_menu/sports/syokuiku/1350758.htm, (2023年6月23日閲覧)
- 文部科学省. (2017年 a). 小学校学習指導要領 (平成29年告示) 解説 家庭編.
- 文部科学省. (2017年 b). 小学校学習指導要領 (平成29年告示) 解説 総則編.
- 文部科学省. (2016年 a). <全体版> 特別免許状等の活用に関する事例集 (1/2).
https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2017/05/11/1385313_001.pdf, (2023年6月23日閲覧)
- 文部科学省. (2016年 b). <全体版> 特別免許状等の活用に関する事例集 (2/2).
https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2017/08/10/1385304_002_1_1.pdf, (2023年6月23日閲覧)
- 文部科学省. (1998年). 特別免許状及び特別非常勤講師制度について.
https://www.mext.go.jp/content/20210514-mxt_kyoikujinzai02-000014888_4.pdf, (2023年6月23日閲覧)
- 文部科学省 国立教育政策研究所 教育課程研究センター. (2020年3月). 「指導と評価
の一体化」のための学習評価に関する参考資料 小学校編 家庭.
- 渡辺雅子. (2021年). 「論理的思考」の社会的構築 フランスの思考表現スタイルと言
語の教育. 東京, 岩波書店.